

わくわく!ふくいっ子



R7.10.7 文責 福井小学校長 鶴本正道

ノーベル生理学・医学賞受賞！坂口志文先生の偉業に学ぶ

昨日、大阪大学特任教授の坂口志文先生が、ノーベル生理学・医学賞を受賞されました。私たちの体を守る「免疫」の働きを深く理解し、病気の治療に新たな光をもたらした坂口先生の偉業についてご紹介します。

坂口先生の受賞理由となったのが、免疫のバランスを保つ「制御性T細胞」の発見とその機能の解明です。私たちの体には、免疫というシステムがあり、細菌やウイルスなどの異物が体に侵入すると、それを攻撃して体を守ります。しかし、この免疫が暴走し、本来守るべき自分の細胞や自分の組織まで攻撃してしまうことがあります。これが自己免疫疾患（膠原病、I型糖尿病など）やアレルギーです。「制御性T細胞」は、暴走しがちな免疫の働きを抑えるブレーキ役の細胞だと言えます。

坂口先生は、この「制御性T細胞」を世界で初めて突き止め、その働きを詳しく解明しました。この発見により、自己免疫疾患やアレルギーの治療法、さらにはがん免疫療法や臓器移植後の拒絶反応を抑える新しい治療法の開発が大きく進むことになったのです。現代病と言われている花粉症の治療や特效薬ができそうな希望がふくらんできました。

坂口先生の研究は、当初、学会でなかなか認められないという不遇な時代も経験したそうです。多くの研究者が「免疫を抑制するT細胞は存在しない」と考えていた時代に、坂口先生は「必ず存在するはずだ」という論理的な確信と強い好奇心を胸に、ひた向きに研究を続けました。約20年にもわたる地道な研究を粘り強く続けた結果、1995年に「制御性T細胞」の正体を明確にすることに成功し、免疫学の常識を覆す大発見へとつながりました。

坂口先生の人生は、私たちに大切なメッセージを伝えてくれます。坂口先生は、「なぜ自分の免疫が自分を攻撃してしまうのか？」という素朴な疑問から研究をスタートさせました。周りの人がどう言おうと、自分が本当に興味を持ったこと、納得のいかないことを深く追求する姿勢が、世界を変える発見につながりました。結果が出なくても、自分の信念を曲げずに努力を積み重ねることが、やがて大きな成果を生み出します。時間がかかるかもしれませんが、「何事にも時間がかかる」という先生の言葉のように、焦らず、着実に一步一步進んでいくことが大切です。

児童の皆さんも、今の学びに、そして将来の夢に、強い興味と信念を持って取り組んでほしいと思います。坂口先生のように、世界を変える可能性は、誰の心の中にも眠っているのですから！

